

本提案の目的は新しい公共性を持つ 「開かれた集合住宅」を設計することである

背景

1. 自身の経験

私はこれまでの人生の中で、6つの家に住んできたが、その住宅は全て集合住宅である。また、現在私以外の家族が住んでいる新しい家も集合住宅である。このように、集合住宅の経験しかない私はよく「家に住むこと」について考えていた。

というのも、どの集合住宅も似たような間取り、仕上げであり、かつ外に開きづらい空間（カーテンを開けても窓にボカシが入っている、窓を開けてもフェンスで視線が遮られる、そもそも窓が小さい）だったため、家の中にいると周囲の環境が忘れ去られ、別の場所にいるのに同じような閉じた空間にいるという、外と内の環境に大きなギャップがあったからである。

この、同じような閉じた空間の体験が、「家に住むこと」を見えない誰かに生活を管理されているような、生活を機械的なものにされているような感覚があった。そしてこの感覚がとても嫌いだった。どうして別のまちに引っ越したのに同じような空間で過ごさなくてはいけないのかと感じていた。「家に住むこと」はもっと外の体験と連続するものとして捉えられないかと思っていた。見方を変えれば、この、同じような空間は、当たり障りなく、誰にでも開かれた空間であり、定点のようなものと捉えることもできなくはない。しかし、私にとってはどうしてもそうは思えなかった。

このような経験をしてきた私は、漠然とした言い方ではあるが、「家は開かれるべきである」と強く感じるようになった。

2. 集合の形式に対する疑問

当たり前のことだが、集合住宅には住戸と共用部があり、このふたつの構成のしかたによって集合の形式が決定されている。階段室型、片廊下型、中廊下型、コア型、ツインコリドール型、ヴォイド型などさまざまである。

これらの構成は避難経路の確保、プライバシーの保護、動線の短縮といったさまざまな条件から考えれば自ずと出てくる形式であり、どのような集合住宅でもいずれかの形式に分類可能である。そして、この構成には、収益を最大化するために共用部は極力コンパクトに抑え込み、住戸部分は同じ間取りを寿司詰め状態で並べるといった合理的な計画が与えられる。

私は住戸と共用部の関係性、同じ間取りの反復が問題だと考えている。住戸と共用部は重厚な玄関扉に遮られており、窓が空いていたとしてもとても小さな、申し訳程度のものであり、共用部との関係性は断ち切られている。このような構成をとってはいかぬと思わないどころか、開こうとしたところで開くことを受け入れることができない。そして、同じ間取りの反復は、ライフスタイルや価値観の多様化に遅れをとっている。

この形式が持つ問題を解決することで集合住宅はもっと豊かなものになる。

